



貧心如法何時足
妾念如蒲葦

增日

昭和四年十二月六日院

見鳳



右は、大西英輔氏所有の阿波研造の書です。

「貪心（たんしん）」＝貪欲な心、欲心

「下澆（げかん）」＝下旬

「見鳳（みほう）」＝阿波研造の号

貪心如海何時是

妄念如苗遂

増日

貪心は海の如く、何時是

妄りに念じ苗の如く

日を増すを遂げる

昭和四年十一月下澆

昭和四年十一月下澆

見鳳[㊦]

見鳳[㊦]

〔見鳳について・ウェブ情報より〕

（一）梅路見鸞は禅を理解する為に弓道が一番適していることから弓道を選んだということです。これは、一般人が禅をそのまま理解するのは極めて難しい為、弓という純粋な道具を利用して、禅を体現する方法です。梅路見鸞は橋流の継承者ですが、正面打起を得る為に本多利実の元で阿波研造と共に修行しており、この頃に本多利実より、梅路「見鸞」阿波「見鳳」の名を頂いたとされています。これは、「鸞鳳 らんほう」と文字から取ったとされ、梅路見鸞と阿波見鳳が表裏一体の人物であった事を裏付けるものでもあります。実際には、阿波研造が梅路武禅道場に何度か稽古に訪れており、梅路見鸞に相談や稽古を受けている様子が、「武禅」には残っております。

さて、この梅路見鸞は生まれた頃より、中津藩より武道・武術を始めあらゆることの英才教育を受け、幼少の頃より麒麟児といわれた秀才でした。

二十五歳にして禅の印可をうけており、日本の書道に限界を感じた梅路見鸞は中国に書道の修行にでて行ったりと様々な事に逸脱した人物でもありました。

梅路見鸞は一般人が禅を得る事によって社会全体がよくなることを信じておりました。

禅というものを解りやすく説明すると「正しい答えを導き得る為の方法」だからです。だから、梅路見鸞の弓道は、決して「中てる」の技術の集積ではなく、正しい答えを得るために弓を用いて弓道としたのです。

また、他の道場と大きな違いは、各個人の骨格の違いに応じて射法も変えており、武禅の写真には誰一人として、同じ射影をした者が居ないのです。また、梅路武禅道場では初心者に限り、「とりかけ」直前に右腕を差し上げ「とりかけ」をする方法を用いており、軽率なとりかけを行おうものなら、棒矢で妻手を叩いて直していただきます。

これは、とりかけの大事さを知り、またとりかけに余分な雑念を持ち込まないようにする意図があり、妻手を差し上げてとりかけに移りはじめてから「おーーーーー」を声を出しながら、とりかけを行うように指導していたそうです。

（二）本多先生が事故でなくなったのは大正6年。阿波先生が「凡鳳」から「見鳳」と改号したのは大射道教設立とほぼ同じ頃ですので大正から昭和に変わる頃（大射道教が昭和2年設立）です。しかも数年で改号されています。

櫻井先生の大著「大いなる射の道の教え」では大正14年見鳳、昭和6年改号（宏鴻）になっています。ですから本多先生が授けた号とは考えにくい。

見鳳時代が一番の円熟期であり、たまたま似たような号なので後生の人がそう考えたと言うことではないでしょうか？

左は。大西英輔・秀弼両氏の父君大西重利氏（明治四十年生）が函館の阿波研造の下へ通い弓道を研鑽していた頃の段位証であり、年月日が同じ頃であることから、書「貪心如海」は今後の精進を期し弟子に与えられたものと推測されます。段位証に「大射道教主阿波見鳳」とあるのも興味深いものです。

段位

大西重利

初段列ス



昭和四年十二月十七日

大射道教主阿波見鳳



阿波研造範士の生涯

明治一三年（一八八〇）

四月四日宮城県桃生郡大川村生まれ、小学校卒業、大忍寺住職から和漢の思想を学ぶ。

明治三一年（一九〇）

漢学塾を開く

明治三二年（二〇歳）

石巻の阿波家の養子に、

明治三三年（二一歳）

弓術師範木村辰五郎に入門

明治三五年（二三歳）

講武館開設（弓道、剣術、柔術、居合、抜刀術、薙刀）

明治四二年（三〇歳）

弓道場開設（儒教、仏教、武道一体の弓道）

明治四三年（三一歳）

東京の弓術師範本多利実に入門

大正九年（四一歳）

深夜、道場で心身の大爆発を体験

大正一二年（四四歳）

新弓団（大射道教）設立

大正一三年（四五歳）

オイゲン・ヘリゲル入門

昭和四年（四九歳）

オイゲン・ヘリゲル帰国

昭和一四年（六〇歳）

三月一日永眠

阿波研造範士の高弟のひとりが安沢平次郎範士十段であり、この安沢範士に師事し、千葉工業大学体育会弓道部の草創期から指導して頂いたのが林初男範士八段です。